

『平家物語評判秘伝抄』の中の『源平盛衰記』

——清盛・宗盛・安徳天皇の評価をめぐって——

阿部美知代

〔要旨〕『平家物語評判秘伝抄』（慶安三（一六五〇）年刊）の中には少なからず『源平盛衰記』を典拠としたと考えられる部分が存在する。そのひとつが「朝敵揃」での「此主上は、不義の王位を續給ひ、」（一七・オ）という安徳天皇の記述である。そして『平家評判』が刊行されて二十年後に成立した『本朝通鑑』（寛文十（一六七〇）年）も安徳天皇の項で『源平盛衰記』を典拠として「不患位之不貴、而患德之不崇……」と記し『平家評判』に近い認識を示している。しかし、『本朝通鑑』という通史と仮名草子『平家評判』を同じ線上に並べることはできない。問題は『平家評判』が刊行されて二十年後に成立した『本朝通鑑』と『平家評判』の安徳天皇評価が共通認識にあることである。渥美かをる氏は「家康の異常なまでの吾妻鏡、盛衰記への傾倒」があったことを説いている。そこで徳川家が史書として扱っている盛衰記を引いている清盛、宗盛、安徳天皇に焦点をあて、その意味について考察する。

はじめに

鎌倉幕府の歴史を編年体で記述した吾妻鏡を徳川家康は重んじてい

た。慶長十（一六〇五）年、いわゆる伏見版の一つとして『新刊吾妻鏡』を家康は活字印行させている。^{〔1〕}そしてその事業に深く関わったのが林羅山である。羅山は家康の命により慶長十七（一六一二）年『吾妻鏡』の年表ともいえる『東鑑綱要』上下二冊を奉じている。更に家康の好学の日は『平家物語』にも向けられ、吾妻鏡と『源平盛衰記』（以下、盛衰記と略す）を照らし合わせて異同を確認している。その目的は政治利用であったことを渥美かをる氏が『古典資料類従19 源平盛衰記』（勉誠社、一九七四）の解説で詳述されている。

家康は数ある『平家物語』諸本の中で、なぜ盛衰記を重んじたのだろうか。その答えを『国史館日録』の記事に見出すことができる。（読み下し、傍線筆者、適宜、句読点、振り仮名を付した。これ以降同）。

凡治承至^二文治^一、源平争乱事多。平家物語異本多。盛衰記亦詳。

加^レ之以^二兼実記^一。治承四年以後者、東鑑復加焉。彼是有異同。今

改補猶劣。乃知^三友元草稿之難^二速成^一也。(寛文七年十月十一日条)

凡そ治承より文治に至るまで源平争乱の事多し。平家物語異本多し。盛衰記は亦詳らかなり。之に加ふるに兼実記を以てす。治承四年以後は、東鑑に復^かり加えん。彼れ此れ異同有り。今、改補すること猶劣す。乃ち、友元は草稿の速やかに難きを知る也。

『国史館日録』とは林鶯峯が寛文二年から寛文十年迄を記した日記で本朝通鑑編集の為、忍岡の邸内に編集所を設置し、国史館と称したので史館日録、国史館日録と言われている。^三

本文に戻ると、国史編纂にあたって『平家物語』の異本の多さに当惑している様子が見てとれる。その中で『盛衰記』が詳細であることから、これに『玉葉』(兼実記)と『東鑑』を加えて考証しようとして試みたが、不明な点は諸本と照合する作業が困難を極めたことが鶯峰の日記から読みとれる。因みに友元(傍線部)とは鶯峰に学び、幕府の儒官となり『本朝通鑑』の延喜以降の編纂に参加した人美友元のことである。^四

ただ、盛衰記の記述の多さだけで国史編纂の史料とする点には問題が残るであろう。

以上が盛衰記の記述が国史として『本朝通鑑』に採用された概略である。

本題に入ると、『平家物語評判秘伝抄』(以下、『平家評判』と略す)には清盛、宗盛、安徳天皇の記述の中に徳川幕府が史書として採用した盛衰記の内容が組み込まれている。『平家評判』はなぜ平家の棟梁である清盛・宗盛、もしくはその血を受け継ぐ安徳天皇の(評)もしくは(傳)に盛衰記の記事を組み込んだのだろうか。

『平家評判』作者が今大路家周^五とするならば、先ずはその蔵書^六から見なければならぬ。読み本系では長府本(長門本)、源平盛衰記、源平闘諍録(以下『闘諍録』と略す)の三本が該当する。しかし、『闘諍録』は今回考察する「禿童」では王莽説話を引いており、八葉大臣説話には触れていない。そして宗盛、安徳天皇の記述がある巻十一は「不足五冊」の記載があることから、今回の考察箇所は欠巻である。更に長府本は『本朝通鑑』編纂のために長府藩から江戸へ寛文五(一六六五)六(一六六六)年に貸し出されたとある。^七とすれば、慶安三(一六五〇)年刊の『平家評判』が長府本を既に目にしていたとは考えにくい。従って盛衰記一本に絞られてくる。そこを出発点として巻一「禿童」、巻十一「能登殿最後」、その他、考察に必要な章段を通して、清盛・宗盛・安徳天皇と盛衰記の記事の引用のあり方から何が見えてくるのか考察してみることしたい。

尚、考察にあたっては渥美かをる氏の『古典資料類従19 慶長古活字版源平盛衰記』(勉誠社、一九七七)を引用した。

1、悪人清盛の造型

『平家物語』の中の清盛の悪行と言えば、鹿谷事件、俊寛、治承三年十一月院政停止し、後白河法皇を鳥羽の離宮に幽閉、高倉宮謀反、福原遷都、南都焼き打ちなどが史実に対応する。この他には禿童、妓王、小督説話などが挙げられる。ここでは盛衰記の引用が見られる巻一「禿童」を題材にする。その構成は、以下のようになっている。

① 四十一・オ〜四十二・オ 禿童を使う小人の疑心と君子の疑心の相違。

②四十三・ウ〜四十四・オ 盛衰記にみる君子の疑心の説明。

③四十四・オ〜四十六・ウ 聖徳太子、孫子、鬼一伝から横目・間士・

謀士など雑学情報。

そこで①②③と順を追って②の中に盛衰記を取り込む意味について考
えてみたい。まずは①にみる清盛の悪行の〈評〉から見てみる。

評曰、かゝる事は評すべき事なしといへ共、末世の為に評を加。

是入道の身に僻事多きが故に、定て世上に嘲哂誹者有べきと思ふ

疑起れり。…(略)… (四十一・ウ)

君子の疑は、疑の心をおこして、吾身の事をとむる。小人は身の

為に疑。君子は人の為に疑。されば此疑の一つによつて、人間の交

にそくはくのあやまち多き物也。 (四十二・オ)

小人は吾身の事のみ考える。そこにやましが現れて人を疑う心が生
じる。しかし、君子の疑いは、治国安民がなされているか否かを省み疑
う、二者の間には「そくばくのあやまち」(点線部) 則ち、仁徳と無知
の大差によつて上下関係に大きな誤解が生じる、というものである。こ
れに続く後文②では盛衰記の八葉大臣説話を『平家評判』作者が独自に
編集した禿童に見立てた横目へと話しをスライドさせている。

惣じて天下国家に横目の者と云を用る事、是疑の心より發る事也。

古徳有世の横目を用たる事は、耳目の士と名付て方々に分散せし

め、世の政を聞しめ、世上に謗事あれば是を改て天下の僻事

を糺す。民の苦事あれば、はやく是を安からしむ。只偏に囹主

の御身の僻事をのみ聞出さしめて、身の非を糺しめんと欲し給へり。

次には諸圀の奉行人の邪正を糺さんが為也。民を苦め奉行人賄
にふけらば早く其罪を改め、偏に天下の人民を憐思召心より此
事を用給へり。故に世上も豊にして上下天下の長久を願。

(四十二・オウ)

大凡は盛衰記の八葉大臣説話を意識していることは推測できよう。作
者の時代に照らし合わせれば、横目の者を用いる「天下国家」(傍線部)
とは徳川將軍家を指している。ということは、小人清盛に対する君子と
は、清和源氏を祖と称する徳川將軍家に他ならない。愚をまとう平氏対
仁徳をまとう源氏の構図である。ここで整理をすると、この評には二つ
の視点が用意されている。前半部①は平家物語の禿童譚における清盛が
如何に小人であつたかを際立たせる構成である。そして②は盛衰記の八
葉大臣説話を踏まえながらも、禿童を横目にすり替えて作者の今の時代
の横目の正当性を語る導入部分であると言える。

しかし、③になると①②に連動しない様相を呈する。その部分は以下
である。

聖徳太子憲法之第十曰。怒を断、怒をすて、人の違を怒ざれ。

人みな心あり。心各とる事あり。…(略)…

我必聖人にあらず。人なへて愚人にあらず。共に皆是凡夫たるべし。

是非の理はたれかはよく是を分ち定んと云り。故に末代に至て

天下国家を持給はん人、此一事に心をめぐらし給へ。

(四十四・オウ)

一見すると①②に連動しないように見えるが、「人間の交にそくばく

のあやまち多き物也。」の具体的説明への移行である。『平家評判』が言わんとするところは、為政者にとつて仁徳だけでは統治できない現実的な部分が傍線部「我必聖人にあらず」に呼応する。そして「是非の理はたれかはよく是を分ち定ん」という権柄（生殺与奪）の行使ができるのは統治者のみであるということ。「末代に至て天下国家を持給はん人」則ち將軍に求められる要素であることを示している。そして左記は下の者に向けての注意喚起である。例えば謀反を企てる者がいた場合、横目、間士・謀士の有効な利用法を述べている。

若世に事を巧者ある時には、必此横目と云に先大事ある物也。良將は様々の策をめぐらし、彼横目に是を聞しめて其横目の耳と目をくらす時は、その君の耳目を闇事安し。

故に忠臣賢臣の間を妨又科なき人を害せしめて、禍の便となすもの也。故に軍法に間士謀士と云事あり。

（四十四・ウ〜四十五・オ）

右の記述は『孫子諺解』『始計第一』に載る「兵者詭道ナリ也」の注釈部分である「親而離之」に該当する、

敵ノ君臣一味シテ中ヨクハ、ヨク口ノキ、タル者ヲツカハシ、其ウチハラヤフルヤウニサ、ヘテ、君ハ臣ヲ疑ヒ臣ハ君ヲ疑フヤウニスレハ敵ノ家ミタル、ナリ。其時ニウツヘシ。

を『平家評判』が独自に編集したと考える。疑わしきは策を弄して自滅に追い込むという極めて強権的な『平家評判』の姿勢が見てとれると

もに、「政不実なる時は民あなどる」と民の暮らしぶりを横目が見れば領主の善政、悪政は一目瞭然であると「故に謹而是を了給へ」（四十五・オ）と下の者に注意喚起をしている。

何故、『平家評判』は『平家物語』の禿童譚から発展した横目、間士・謀士の構成をとったのか。当時の横目に目を向けてみると、横目とは横目付けともいい、江戸幕府が大名の施政監察のため全国に派遣する諸国巡見使のことである。古例は慶長八（一六〇三）年近江国、同十四（一六〇九）年越後国・若狭小浜藩、元和元（一六一五）年、会津藩に巡見使を送り藩政の得失・民衆の利害を監察している。監察を受ける側にとつては巡見使の接待、領内に抱える諸問題の応急措置に追われ、諸藩には大きな不安と動揺を与えた。以上を考え合わせれば平氏の悪行を逆手にとつて当代が抱える不安や不満への対処、政治利用という側面が考えられる。しかし、横目の正当性を語るに際して盛衰記の記事を何故、持ち込んだのか。

兵藤裕己氏は、近世初期の平家の物語が徳川家にとって重要な意味をもっていたことを指摘する。

たとえば近世の初頭、「平家」が幕府の式楽に列せられたことも、徳川家康が清和源氏（新田流）の由緒のもとに征夷大將軍となったことと無縁には考えがたい。近世初頭に『平家物語』がさかんに版行されたことも、それが近世初頭にあつても源氏將軍家の草創・起源神話としての一面を有していたことを示唆している。

平家一門の鎮魂の物語は足利義満にとつて源氏將軍家の草創・起源を語る神話であつたように、天下統一を果たし、世襲形態がもはや確立さ

れた徳川家にとつても平家の物語は草創・起源神話の一面をもつていた、と解することができる。

『平家評判』が盛衰記を引くには政治的側面もあったことは、その内容からも確かである。しかし、『平家評判』が仮名草子の類であるとするならば、清盛に向けて繰り返し「掠め取る」という極端なまでの表現と、盛衰記の八葉大臣に見立てた仁徳ある徳川將軍家という平氏対源氏の構図は、源氏將軍家の草創と正当性を意図的に演出したとは考えられないだろうか。『平家評判』「禿童」の章段最後は、

傳でんに曰、鬼一軍略ぐんりやく之篇へん曰、敵乃調子を聞て、軍の善悪しるひでんを知秘傳しひでんには、
管かんにあらず、鼓こにあらず、又音聲おんせいにあらず。音おとなく心をしれと云り。
誠まことにふかき慮おもんばかりあり。(四十五オウウ)

である。鬼一軍略篇が特に機能しているわけではない。要するに傍線部が示す八葉大臣に見立てた君子(徳川將軍家)の疑いの心を理解せよ、誠に思慮深いことである、という賞賛で閉じていることを考え合わせれば、八葉大臣説話を組み込んだ禿童譚を読む、もしくは楽しむ人物の為の構成であったと考えたい。

2、記録を残さなかつた平氏

『平家物語』¹³における平宗盛の描写は、兎角、棟梁としての資質を問われる場面が多い。巻六「横田河原合戦」¹⁴では平家一門が時の流れを読みとらない愚鈍を次のように記している。

東国北国の源氏等、蜂の如くに起り合ひ、只今都へ亂れ入る由聞えしかども、平家の人々は、風の吹くやらん、波の立つやらんをも知り給はず。かやうに花やかなりし事ども、なか／＼云ふがひなうぞ見えし。

右記は寿永と改元された九月、城四郎長茂が信濃国横田河原で木曾義仲と戦い、平氏が大敗したにも関わらず、目前に迫る危機を認知しないまま、大嘗会御禊の儀式が行われた記事である。この記事に関して平氏の棟梁・宗盛の様子を『玉葉』は寿永元年十月廿一日条に詳細に記している。¹⁵

大將依^レ未^二着陣^一、排^コ徊南殿御後邊^一、少將於^二左衛門陣座邊^一、相^コ待出御^一、騎馬供奉云々、先^レ是、節下内大臣參入、今日即着陣云々、而依^レ無^二便宜^一、無^二申〔文〕^一、…(略) …

節下大臣兩度落馬、^{待賢門前一所、三條京極一所}節旗柄折了、是不吉の兆也云々、大將未だ着陣せずに依りて南殿御後邊を徘徊す。少將、左衛門陣座の邊に於いて出御を相待つ。騎馬供奉云々。是より先、節下内大臣參入す。今日即ち着陣云々。而して便宜なきにより、申し文も無し。

…(略) …
節下大臣、兩度落馬す。待賢門前一所、三條京極一所。節旗の柄折り了はんぬ。是、不吉の兆し也と云々、

宗盛が待賢門と三條京極で落馬した記事が見える。前々日の十月一日条に目を向けると、

自_レ院賜_二大將可_レ騎之馬_一、黒鹿毛、飾_レ之敢無_レ驚氣_一、明後日拂曉、可_三持來_一之由召_二仰之_一、陰陽頭泰親朝臣來、召_レ前問_二天變事_一、密々令_レ見_二奏案_一、

院より大將騎るべき馬を賜う。(黒鹿毛、之を飾るに敢えて驚氣することなし。明後日拂曉、持ち来る可しの由、之に召し仰す。陰陽頭泰親朝臣來たる。前に召して天變の事を問う。密々に奏案を見せしむ。)

(寿永元年十月一九日条)

この内容から察すると、後白河院から宗盛に黒鹿毛の馬が下賜された。

馬が唐鞍を装着して驚くか否かを敢えて確認した、(大嘗会御禊の)当日の明け方に馬を連れてくるようにと宗盛に後白河院から仰せがあった、という趣旨の記事である。裏を返せば、唐鞍の装飾のみであれば馬は暴れない。しかし、唐鞍の重みに加えて更に人が乗れば馬の負担は増大する。まして黒鹿毛が騰馬の性質だったらどうであろうか。波線部の兼実が泰親に「天變の事を問う。密々に奏案を見せしむ。」という一文を推測するに、宗盛の落馬は予め想定されていた、もつと言うならば、後白河院に乗せられて「節旗柄折了、是不吉之兆也云々」という天変の予兆を人々に印象付ける結果を自ら導き出してしまったと言えよう。

『玉葉』は更に大嘗会御禊について「行列次第散々、近代之例也」とこき下ろし、關白入道(藤原基房)が行列を見物した際の「違例」五項目(落馬、作法、装束等)を『玉葉』は載せている。

宗盛以下平氏一門は何故、かくも公卿・殿上人の笑い者になるような失態を重ねねばならなかったのか。要するに平氏は高官高位の職にあり

ながら公事の記録を残さなかったということである。『玉葉』にその一端を窺わせる記事がある(読み下しの()内、筆者)。

已刻、花山院大納言被_レ來、數刻言談、大嘗会御禊、大將作法不審事、余問_レ之、彼父相國、仁安元年命_二供奉_一之故也、罷歸可_三注獻_一之由被_レ答、及_二申刻_一被_レ還了 ……(略)……(寿永元年十月十八日条)

已の刻、花山院大納言(藤原兼雅)來たれり。數刻言談す。大嘗会御禊、大將(宗盛)は作法審らかならざる事、余に之を問う。彼の父相國は、仁安元年、供奉せしむるの故也。罷り歸りて注獻すべきの由、答えられ、申の刻に及び還られ了ぬ。

花山院大納言がやって来た。(大嘗会御禊に関する有職故実について)話しをした、大將(宗盛)は作法について詳しくないのだろうかと兼実に(花山院兼雅が)問うた、仁安元年、(憲仁親王立太子)に清盛も(春宮大夫として)供奉していたからということだった。已刻から申刻まで四〜五時間、話し合いをした、帰ったら宗盛に申し上げようと答えて帰った、というのが大筋であろう。

右の記事には多くの矛盾点があると言わざるを得ない。大嘗会御禊は天皇が即位した時に行われる儀式であること、高倉天皇(憲仁)の大嘗会御禊が行われたのは仁安三年十月二十一日であること、その際、御禊行幸日供奉五位已上の中に藤原兼雅、宗盛、教盛、經盛、重衡の名が挙がっている。そして宗盛は新帝即位の御禊次第司御後長官を拝命しているのである。高倉天皇の大嘗会御禊については『兵範記』の記述からも相当の長期間に涉って勘文による審議が行われている。宗盛が安徳天皇の大嘗会御禊の作法・装束について儀式の前々日に至っても詳しくない

とは如何なることか。

平氏は歌を詠んでも公事の記録を残さなかった、言うなれば、公事の記憶すら曖昧であったのである。高官高位を一門で占めたが故に有職故実を習う相手を敵に回してしまった（例えば、藤原基房、九条兼実）ということに尽きる。記録という点においては宗盛ひとりの責任ではないにしても、高位高官を極めた家が次にすることは、先ずは家の記録を残すということが棟梁に求められる仕事である。『吾妻鏡』がそうであったように。こうした負の要素が平氏の棟梁・宗盛の資質の欠如として平家の物語に付加され、形成されていったのである。その最たる記述が『平家評判』作者によって描出される暗愚の宗盛像と「正当性」への問題である。

3、宗盛の戯画化について

『平家物語』巻十一「能登殿最期」は安徳天皇が二位の尼に抱かれて入水した直後の章段である。潔く戦い、散っていった人々の中で宗盛・清宗父子は「海に入らんずるけしきもおはせず」といった様子に「餘りの心憂さに」思った家臣に海に突き入れられるという姿が描出されている。それに対応する『平家評判』巻十一「能登殿最後」では、宗盛が自害せずに生け捕りの恥を受けたことについて次のように評している。

死を悪で、生を愛するは、なへて人の習とはいへども、義を守節に臨む時は、豈生命を愛して、天地の法に違べけんや。其上宗盛苟も天下の武将としてしかも平氏の大将たり。…（略）…

（二十四・オ）

良將、妄に命を捨るをのみ本意とはすべからず。一度大功をたてんと思ふ時は、一旦の恥を受と云共、小名を貪事なけれ。されども此宗盛、さやうの心得ありて命を惜人には非ず。故に此人、末代の今に到るまで其名を穢し給ふもの也。 （二十四・ウ）

この評とほぼ同じ視線を向けているのが盛衰記の評価である。以下に示す。

前ノ内大臣宗盛ハ。苟クモ爲ニ征夷之將一。忽チニ囚レ匹夫之ク手ニ永ク懸ルニ訕於萬人之脣一獨リノ殘ニ耻於累祖之跡一無慙ト云モ疎也 （卷四十三、一七三頁）

『平家評判』と盛衰記の記述の全てが一致しているわけではないが、いずれも「生きての恥、死にての辱、何れも劣らざりけり」（大臣殿被斬）を想起しての評であろう。『平家評判』は特に死に際に拘りを見せている。しかもその語り口は平家の棟梁として恥すべき宗盛の戯画化である。「傳曰」は宗盛に自害を頻りに進める五郎兵衛忠清の説得を載せている。

傳曰、五らう兵衛忠清志度浦にて、宗盛の御前に参畏て申けるは、軍の様一定平家の運盡果ぬると見えて候。…（略）…速に御自害候べし。忠清御かいしやく仕。恐多き申事に候へども、御首を給て源氏に参、義経が実見に入候べし。然らば其罪をゆるし、命をば助置候べし。左様においては、其時分を窺候て、頼朝か義経を討取り候べし。 （二十四・ウ）二十五・オ）

「傳曰」としていることから、その話形は謡曲「大仏供養」(金春流では「奈良詣」)の中で南都の大仏供養に臨む頼朝を景清が討とうとして失敗する話しを要素としていることが考えられるが、「大仏供養」の演能記録としては慶長十一、十二、元和元年、寛永八年と演能の回数はいくつか少ない。むしろ、延宝九年以降に演能記録が目立ってくる。いずれにしても、能または古浄瑠璃から発生した伝承ということになる。

五郎兵衛忠清は『平家物語』巻五「富士川」において「富士河に鎧はすてつ墨染の衣ただきよ後の世のため」と落書に読まれた人物である。水鳥の飛び立つ羽音に源氏が攻めてくるものと勘違いをして維盛とともに敵前逃亡をした人物が、宗盛に自害の勧めをする役割を与えるあたりに講釈に似た展開があると言えよう。本文に戻ると、忠清は宗盛に繰り返し自害の説得をするものの、宗盛の答えは、

知盛か教経などが首こそゆ、しかるべけれ。我は君の御供を仕べき身也

という「愚」を作者は宗盛像に付加する。そこへ景清の登場となり、宗盛の「愚」は更に添加されるのである。

上総悪七兵衛景清、大将の御事はも心もとなくやおもひけん。急小舟をさしよせて、忠清に逢、いかにや宗盛は御自害候ひつるやと問。：(略)：

宗盛かけきよが詞を聞、急舟底にひれふし、我をばともして助てたべ、景清頼と申されければ、景清あざわらつて、最後に我等ごと

きの凡夫を御頼あらんより、西方浄土の弥陀を御頼おはしませ。

(二十六・ウ(二十七・オ))

宗盛の戯画化の締めくくりは、「天下に隠なき最後をつとめ」(二十五七・オ)て名を残すことである。しかし、主君の首を取って敵將に差し出し、隙を窺って相手を倒す、結果、名を上げる、という構図は果たして高名を残すことになるのか。意図的に名を残す行動は『平家評判』自身も批判的である(「先帝御入水」二十・オ)。名を残すことについては補助的題材であって、むしろ宗盛をかくも「愚」の極みに仕立て上げることが本流なのではないだろうか。時代は下るが『本朝通鑑』に宗盛の俗傳を以下のように載せている。

俗傳。宗盛留_二宋船_一乗_レ之。軍敗即欲_二逃入_レ宋。以_二義經急攻_一而不_レ能。

宗盛は沖に停泊していた宋船に乗って宋に逃げようとしたが、義經の急襲に遭い叶わなかった、という俗傳である。

『本朝通鑑』は、三代將軍・家光の命により林羅山が神武天皇から宇多天皇に至る歴史を『本朝編年録』として編集し、家光に進上した。しかし、明暦の大火により消失、その後、四代將軍・家綱の命により林鷲峰が中心となって国史編纂事業を再開。新たに『本朝通鑑』として寛文十(一六七〇)年に成立している。

他方、『平家評判』は刊行以後、多くの読者の支持を得ていたことは、『平家評判』の反駁書である『平家物語評判瑕類』(正徳二(一七二二)年刊)の序に「今世妾男子作_二評判_一流行_二四方_一其評_レ也」とあるよう

に多くの読者に親しまれていたことがわかる。

『本朝通鑑』が載せる宗盛の俗傳は『平家評判』が広く読まれる過程で戯画化された宗盛像が新たな傳を発生させたと推測することも可能であろう。

加美宏氏は「『本朝通鑑』が徳川幕府が成立してくる歴史的な正当性を明らかにした史書としても、重要な意味をもつもの」と説くとともに、「六国史以後の歴史を叙述するに際して記録として残っていないものについては「物語・説話集・軍記などの「小説」「稗史」類の採用は不可欠であった」としている³⁵⁾。

このことを考えた時、平氏の棟梁である宗盛が、我が身大事さ故に宋に逃げ込もうとする卑怯さを、徳川幕府が成立してくる歴史的な正当性を明らかにした史書に俗傳ではあるものの載せる意味を見落としてはならない。無論、『平家評判』が『本朝通鑑』に与えた影響の有無云々を述べるものではないことを断った上で、『平家評判』がかくも宗盛を戯画化する必要性がどこにあったのか。その点を考えたい。

抑もこの戯画化は何を基にしたのか。読み本系で唯一、宗盛の出自に触れているのが盛衰記である。以下に示す。

宗盛ハ入道大相國の子ニモ非ス。我ガ子ニモナシ…(略)…入道ノ子ニ成ケル故ハ、重盛ヲ嫡子ニ儲テ後、又懐妊シタリケル…(略)…月滿シテ生レタルハ女子也シ…(略)…唐ヲ笠法橋ト云ケル者カ許トニ男子ヲ産ミタリケルニ取り替ヘツ、入道ニ男子儲タル由告タレハ…(略)…

阿波民部成良の返忠により、平氏が壊滅的な打撃を受けた報告を知盛

から聞いた二位の尼・時子は絶望し、宗盛の出自を突然語り出す場面である。宗盛は清盛夫婦の子ではなく、清水寺北の坂辺りで唐笠を商う者の子であったとする³⁶⁾。『平家評判』がこうして宗盛の出自に加えて平家の棟梁としてあるまじき「生きての恥、死にての辱、何れも劣らざりけり」という意識から創出した戯画化、そして何よりも「正当性」と考えたい。以上のことから、『平家評判』作者が盛衰記を見ていた蓋然性は高いのではないだろうか。

では何故、宗盛の戯画化を「傳曰」に載せる必要があったのか、という点について考えたい。例えば巻五に集中する『新刊吾妻鏡』（以下、吾妻鏡と略す）の挿入である。矢印以下は『平家評判』に対応する吾妻鏡の記述である。

巻五 「大庭早馬」十三・ウゝオ ↓治承四年八月九日条³⁵⁾
 同 「朝敵揃」十五・オゝウ ↓治承四年八月六日条³⁶⁾
 同 「伊豆院宣」七・オゝ八・オ ↓治承四年四月九日条³⁷⁾
 同 「伊豆院宣」八・オゝウ ↓治承四年六月一九日条³⁸⁾
 同 「伊豆院宣」八・ウゝ九・オ ↓治承四年六月二七日条³⁹⁾
 巻十一 「先帝御入水」二十一・オゝウ ↓寿永三年三月一日条⁴⁰⁾

吾妻鏡は特に徳川家康がこれを重んじ、伝本の収集に努めるとともに、慶長十(一六〇五)年、いわゆる伏見版のひとつとして活字印行させている。

また、渥美かをる氏は「吾妻鏡と盛衰記に対する家康の、異常なまでの執着が察せられる」と解説で述べている⁴¹⁾。尚、本論で参照した『新刊吾妻鏡』は無刊記で慶長・元和年中の刊行と推定されていること、承兌による跋文は整版で、伏見版のものがそのまま襲用されている。第一冊

目録終葉裏に「羅浮本云」として林羅山の考証を移写しているというものである。⁽¹²⁾

これらの章段に「傳曰」として吾妻鏡の多用は何を意味するのか。平家の末路を暗示する「大庭早馬」そして滅びかけた源家が復活の鼓動を象徴する「朝敵揃」「伊豆院宣」に夥しいまでの吾妻鏡の引用、そして巻八「征夷將軍ノ院宣」の（傳曰）における盛衰記を基にした頼朝賞賛の記事（二・ウ・五・オ）、更に清盛の血を引き継ぐ安徳天皇の滅びによって源家創業の夢が実現する「先帝御入水」に『平家物語』が載せていない平家追討の下し文を載せている点に注目したい。更には安徳天皇誕生に際し、「世の禍のもとたるべし」「世をなやまし給ふべき王子たるべし」「王子御誕生ましくければ天下の公役しげくして…苦事多して、終には天下みたれ、この王子もためしなき御難にのみあはせ給ひ」（巻三「許文」六・オ）、「朝敵揃」では「此主上は、不義の王位を續給ひ、」（一七・オ）は盛衰記の「不レ患二位ノ之不レ貴一ナラ。而患二德之不レ崇。不レ耻一祿之不レ夥。而耻二智之不レ博一云ツトイヘリ」に対応するものと考えられる。或いは又、

評曰、雲日月におほつて其光をうしなふ。人悪縁にしたしんで其徳をけがす。実や十善の帝とならせ給ひ、一旦の御果報めでたしといへども、悪縁になれしたし給ひければ、今更かゝる御身とならせ給ひ、長生不老の御業も、忽に尽果、落花の波風にくたけるがごとし。
（「先帝御入水」二十一・オ）

と（傳曰）（評曰）の中で十歳にも満たない帝に向ける『平家評判』の冷徹な視線である。清盛の不徳を受け継いだ幼帝への正当性の完全否定

である。

これまで見てきたように『平家評判』が（傳曰）で語り始める記事は殆どが盛衰記、吾妻鏡であることが察せられる。

源家復活を象徴する特定の章段に吾妻鏡の多用と盛衰記を典拠としたと考えられる右記のあり方は宗盛の戯画化、安徳天皇の正当性の否定をも含めて、源家創業に特別の思いを抱いている人物の為に挿入したのではないだろうか。そしてこれらを（読む）もしくは（聞）いて最も関心を寄せる、又は喜ぶのは誰であろうか。

今一度、「吾妻鏡と盛衰記に対する家康の、異常なまでの執着が察せられる」という渥美かをる氏の解説と兵藤裕己氏が説いた、

たとえば近世の初頭、「平家」が幕府の式楽に列せられたことも、徳川家康が清和源氏（新田流）の由緒のもとに征夷大將軍となったことと無縁には考えがたい。近世初頭に『平家物語』がさかんに版行されたことも、それが近世初頭にあつても源氏將軍家の草創・起源神話としての一面を有していたことを示唆している。

という点を思い出したい。そして、『平家物語評判類』（正徳二（一七一二）年刊）の凡例に「評判の作者姓字未レ審但世に憚有不レ記」とあるように、権力者の側近く伺候していたであろう『平家評判』作者によって家康が最も関心を寄せている盛衰記、吾妻鏡を織り込んで語る『平家評判』の原型のような語り物がごく早い段階で出来上がっていたのではないかと推察する。そして時を経て、戦場での実戦経験のない家光に向けての兵法に絡めた政治利用あるいは鑑戒として肉付けされ、十二卷二十四冊の『平家評判』が成ったと考える。

まとめ

抑も『平家物語』の中で源平両氏はどのような位置にあったのか。慈円が「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後ムサノ世ニナリニケルナリ」と『愚管抄』で記したように源平両氏は「ムサ（武者）」であった。平治の乱で義朝が滅び、平家が「殿上の交りをだに嫌はれし人の子孫にて、禁色・雑袍をゆり、綾羅錦繡を身に纏」（卷一「我身の栄花」）い、権力を恣にした結果、朝廷・廷臣の憎しみを受け、平氏の多くは西海に滅んだ。ところが、頼朝はどうか。「武勇の名誉長じ給へるによつて、坐ながら征夷將軍の院宣」（卷八）が下されたと『平家物語』は記している。そしてこれに対応する『愚管抄』の記事は「院ニハ左右ナキモノニナリニケリ」「ヌケタル器量の人ナリ」と頼朝を賞賛している。更に『平家評判』は以下のように評している。

其人に當りたる事、時の才あるに似たり。され共法皇の御威光にはあらず。是頼朝の威光たるべし。此故にや此時よりして、王威大半すたれ、武威大に盛になれり（卷八「朝敵揃」二・オ）

かつて慈円が「ムサ」と蔑んだ武者という位置が、「此時よりして、王威大半すたれ、武威大に盛になれり」に成し遂げた頼朝を高らかに評している。『平家評判』は清盛に「掠め取る」という悪行を更に付加し、宗盛には「愚」という戯画化を、そして安徳天皇には清盛の不徳がその身に及ぶ者としての正当性の否定を徳川家が史書と位置づけている盛衰

記、吾妻鏡をもつて三者の正当性への否定を明確化したといえよう。翻つて「坐ながらにして征夷將軍の院宣」を受けた清和源氏を祖と称する徳川家が仁徳を備えた正当性への誇示ともいえよう。

注

- (1) 『新刊吾妻鏡』国立国会図書館蔵解題による。
- (2) 『国史館日録』国立国会図書館蔵、(寛文七年十月十一日)
- (3) 『国史大辞典』第五卷（吉川弘文館、一九八五）、国史館日録の項六四九頁。
- (4) 前掲、第十一卷、人美友元の項九五三頁。
- (5) 拙稿「平家物語評判秘伝抄」―作者周辺について―（『国文目白』第五四号、二〇一五・二）。
- (6) 福田安典「武田科学振興財団杏雨書屋蔵『今大路家書目録』について―お伽の医師の蔵書―」（『藝能史研究』129、一九九五・四）、七一頁。
- (7) 『平家物語大事典』（東京書籍、二〇一〇・十一）、長門本の項七三九頁。
- (8) 『慶長古活字版源平盛衰記』の八葉大臣説話は以下である。
昔モ是レ風情ノ例ヤ有ラントソ私語ケル或人ノ申ケルハ本朝ニ例ナシ漢家ニ八葉大臣ト云ケル人天下無雙ノ賢臣ニテ忠ヲ賞シ罪ヲ憐シ事堯舜ノ政、化ニモ不レ異ナラ依レテ之ニ今ノ如ク禿童ベヲ多クソロヘテ金ヲ歸鳥ト云鳥ヲ持ッテ國々巷々ニ放チ立テ仰セ含云國廣ク民多クメ萬人ノ歎ヲ難レ及ニ天聽ニ歎聞出ニ随ヒテ奏セヨ直ニ召シ行コナント有ケレハ愁ヲの殘者モナク恨ヲ含ム者モナシ國豊ミテ民悦ビテ政徳海内ニ及ホシケリサレバ是ヲハ善者ノ童ハト名付トイヘリ今ノ禿童ハハ事ニ觸レテ歎ケキ物ノ煩ラヒアリケレバ悪者ノ童ト云ツヘシ（卷第一四七頁）。
- (9) 前掲（3）第十四卷、横目の項三八一頁。
- (10) 大館右喜「江戸幕府巡見体制の一考察」（『帝京史学』（19）、二〇〇四・四）一五八頁。
- (11) 『法と権力の史的考察』（創文社、一九七七・八）所収、大平祐一「江戸幕府巡

- 見使考」二二五～二二七頁。
- (12) 兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、二〇〇〇・一) 三十頁。
- (13) 『昭和校訂平家物語 流布本』(武蔵野書院、一九四三・一〇)
- 尚、『平家物語評判秘伝抄』は『日本古典文学大辞典』第五卷(岩波書店、一九八四・一〇、三九九頁)によれば流布本『平家物語』の各巻の章の内容を要約、概略を述べ論評したもの、としている。よって本文で引用する『平家物語』は流布本を底本とする。
- (14) 前掲(13) 卷六「横田河原合戦」三二〇頁。
- (15) 『玉葉』第二(名著刊行会、一九九七・九)、五七八頁上段。
- (16) 前掲(15) 五七七頁下段。
- (17) 前掲(3) 第三卷、六四四頁、二段目。
- (18) 前掲(3) 六四四頁、四段目。
- (19) 前掲(15) 五七八頁下段。
- (20) 前掲(15) 五七六頁下段。
- (21) 前掲(15) 五七八頁下段。
- (22) 前掲(15) 五七八頁下段。
- (23) 前掲(3) 第八卷、頁。
- (24) 『史料大成18 兵範記四』(内外書籍、一九三六)、一九四～一九八頁。
- (25) 前掲(24) 一六八～一六九頁。
- (26) 前掲(24) 一五八頁。
- (27) 前掲(24) 一一八～二〇二頁。
- (28) 『謡曲大観第二卷』(明治書院、一九三一・一) 所収「大佛供養」を参照。
- (29) 演能記録については、国文学研究資料館の連歌・演能雅楽データベースを参照。
- (30) 前掲(13) 卷五「富士川」二六二頁。
- (31) 高名を残す事について『平家評判』は「先帝御入水」で次のように述べている。
夫後世に其名をたかくなしぬる人、全求て是を得たるにあらず。たゞ大道を専守るによつて、其徳、世の為人の為と成て、必其名を高くせり。(二十・オ)。
- (32) 『本朝通鑑』卷七五(国書刊行会、一九一九)、二六一〇頁。
- (33) 加美宏『太平記理尽抄』と『本朝通鑑』——近世における『太平記』受容史の一斑——『人文学』第百四十六号、同志社大学人文学会、一九八八・九。
- (34) 宗盛の出自『慶長古活字版 源平盛衰記』巻第四十三、一六〇頁。
- (35) 『新刊吾妻鏡』巻一(国立国会図書館デジタルコレクション) コマNo. 19・20。
- (36) 前掲(35) 巻一、コマNo. 19。
- (37) 前掲(35) 巻一、コマNo. 13・14。
- (38) 前掲(35) 巻一、コマNo. 16。
- (39) 前掲(35) 巻一、コマNo. 17。
- (40) 前掲(35) 巻三、コマNo. 56。
- (41) 渥美かをる解説『古典資料類従19 慶長古活字版 源平盛衰記』(汲古書院、一九七四・八) 解説六二九頁。
- (42) 前掲(1) 解題による。
- (43) 前掲(35) 九國下し文については『新刊吾妻鏡』巻三(国立国会図書館デジタルコレクション、寛永三刊)、コマ番号56を参照した。尚、『平家評判』の下文は以下である。その一部を記す。
下す 鎮西九國の住人等早鎌倉殿の御家人として、且、は本のごとく安堵し、且、は各引率して、平家の賊徒を追討すべき事。(二十一・オ)
- (44) 『日本古典文学大系86』(岩波書店、一九六七・一)、二〇六頁。
- (45) 前掲(44) 二七五頁。
- (46) 前掲(44) 二七六頁。

(日本文学専攻 博士課程後期三年)

The Genpei Jhosuki as Seen in the Heike Monogatari Hyoban
Hidensho: Considered in Terms of the Estimations of Kiyomori,
Munemori, and Emperor Antoku

ABE Michio

[Abstract] The *Heike Monogatari Hyoban Hidensho* [Secret Teachings on Criticism and Judgment of the Tale of the Heike], published in 1650, contains numerous passages that are thought to have the *Genpei Jhosuiki* [Account of the Rise and Fall of the Minamoto and Taira Houses] as their source. One instance of this is in the “Cho-teki zoro” [Listing of Enemies of the Court] section, which states about Emperor Antoku that “this emperor succeeded to a reign that was wrongful” (17-°). Then, published 20 years after the *Heike Monogatari Hyoban Hidensho*, came the *Honcho tsugan* [A Mirror of Japanese History] (1670), which also states in the section on Emperor Antoku that he “did not suffer due to his position being ignoble, and he did suffer due to his virtue not being venerated,” citing the *Genpei Jhosuiki* as its source. This indicates an understanding that is close to that in the *Heike Monogatari Hyoban Hidensho*. However, the *Honcho tsugan* is a historical overview while the *Heike Monogatari Hyoban Hidensho* is a popular literary work (kanazoshi), and the two cannot be compared directly. The issue is that the *Honcho tsugan*, which was written 20 years after the *Heike Monogatari Hyoban Hidensho* was published, expresses a common understanding with the *Heike Monogatari Hyoban Hidensho* regarding its estimation of Emperor Antoku. Kaoru Atsumi made the point that Tokugawa “Teyasu had a practically abnormal admiration for the *Azuma kagami* [Mirror of the East] and *Genpei Jhosuiki*.” This paper therefore examines what that means by focusing on the figures of Kiyomori, Munemori, and Emperor Antoku in the *Genpei Jhosuiki*, which the Tokugawa family treated as a historical work.

[Key Words] Insinuation, legitimacy, caricature, *Genpei Jhosuiki*, *Azuma Kagami*